

第 12 章

次世代へ

第1節 熊本地震の記憶の継承

1. 熊本地震の記憶の継承に向けて

(1) 記録誌等

熊本地震における本市の被害状況や初期対応、復旧・復興のプロセス等を記録し、今後の防災対策などに活用するとともに、今回の震災で体験した貴重な経験を次世代に伝承するため、震災の記録誌編纂を実施した。この記録誌は、次世代の本市のほか、国や他の自治体等においても活用され、今後の防災対策の参考となるものを目指している。

本冊のほか、上下水道局の復興記録誌、議会事務局の平成28年熊本地震「熊本市議会の動き」等、各局における震災対応の記録も編纂を予定している。

(2) アーカイブ

熊本地震に関連する写真や映像、その他文書資料を収集しデジタル化して公開することにより、熊本地震の記憶の風化を防ぐとともに、国内外における防災・減災対策に資することを目的として、東日本大震災時に宮城県が行ったようなパッケージ型のデジタルアーカイブシステムを平成29年3月末に県が構築した。本市も県のデジタルアーカイブシステムを活用し、震災関連の資料を後世に、あるいは広く市内外へ伝える取組を行うこととしている。

今後も県と連携して、デジタルアーカイブシステムでの公開へ向けた震災記録資料収集等の取組を進めていくこととしている。

図表 12-1-1 熊本地震デジタルアーカイブ



(3) その他の取組

記録誌等、アーカイブのほかに、本市では震災復興計画の「震災の記憶を次世代へつなぐプロジェクト」において、今回得た教訓を市内外において共有するため、震災にかかわる記録を集積・発信するとともに、「熊本地震の記憶」を伝承する取組を以下のとおり実施している。

①平成28年熊本地震「震災の記録」“再起へ”

熊本地震からの一年を振り返り、震災の記憶をとどめ、当時の様々な記録、体験等を教訓として後世に分かりやすく伝えるため、政策局広報課において写真を中心に平成28年熊本地震「震災の記録」“再起へ”を編纂し、平成29年3月に発行した。熊本地震発災時の避難者の様子、倒壊した建物、インフラへの被害、避難所の状況、崩壊した文化財、支援の状況などを克明に掲載している。

②副読本の作成

熊本地震では、地震に対する日頃の備えや発災後の避難行動等で様々な課題が生じた。教育委員会では、今回の震災の体験や教訓を踏まえ、次世代を担う子どもたちに対し、自然災害に関する知識や被災した場合の適切な対応等について様々な機会をとらえて教育する必要があるとの認識から、教科を横断した系統性のある防災教育を実施することとした。教育委員会では、児童生徒の発達段階に応じて、小学校低学年用・中学年用・高学年用および中学校用の4分冊の副読本を作成することとした。

作成に当たっては、平成29年度に企画および編集作業に取り組み、同年度末までに各学校の教室に据え置くこととしている。さらに平成30年度からは、社会科、理科、特別活動等の授業で、教科書の内容を補完する教材として活用することを予定している。

③中央区つながるマガジン「まちのわ」

「まちのわ」は中央区の暮らしの中の何気ない瞬間を切り取って伝えるまちの情報誌で、中央区役所や関係施設、中央区内の病院や美容院などで無料配布している。平成 29 年 3 月 v o l . 9 では、「まもる」をテーマにした防災特別号を発行した。くまもとの歴史遺産を次世代へつなぐ取組や、震災から広がった地域のつながり、防災の知恵を次世代へつなぐ取組等を掲載している。

④都市政策研究所による「熊本明治震災日記」の現代語訳刊行

本市の都市政策研究所は、過去地震の記憶を後世へ受け継いでいくと同時に、今後の防災・減災対策につなげるものとして、明治熊本地震に関する詳細な記録である「熊本明治震災日記」（水島貫之著・明治 22 年発行）の現代語訳版を平成 28 年 12 月 20 日に刊行した。

「熊本明治震災日記」は、明治 22 年 7 月 28 日に発生した明治熊本地震に関して、当時の様々な被害状況、行政機関や被災した市民の動向等が克明に記されたもので、本市が今回体験した熊本地震の状況と相通じる教訓が読み取れる記録となっている。

日記の現代語訳に当たっては、原文の文意や雰囲気損なわない現代語文になるように留意したほか、当時の熊本市街と熊本県の地図を収録するなど、読みやすく親しめるよう工夫した。

⑤図書館による震災関連資料収集

図書館では、郷土資料の一部として、熊本地震に関する資料を収集している。主に書籍を含む紙ベースの資料の収集を行っているが、街の張り紙や、避難所で配布されたチラシなど、当時の状況を生々しく伝える資料も含まれる。

これらの資料を分類、整理、保存し、提供することで、後世に災害の教訓を継承する。